



「環境フォトコンテスト2015」で選ばれた優秀4作品のうちの1点。「赤とんぼ」柯智芳、Olympus (China) Co., Ltd.

オリンパス

世界シェア約70%を誇る消化器内視鏡をはじめ、顕微鏡やカメラ、ICレコーダーなど精密機器メーカーとしておなじみのオリンパス株式会社。同社では毎年、環境月間に国内外のグループ会社を挙げて環境啓発活動を実施しています。今年、その国内イベントの一環として地球環境基金の「本de寄付」をご採用いただきました。

※「本de寄付」の詳細は、<http://www.erca.go.jp/jfge/donation/raise/hondekifu/>

サポーターインタビュー
NPOを支える方々

Heart & Heart

「水の循環」をテーマに 環境貢献活動を展開

オリンパスグループでは、持続的発展が可能な社会の実現に向けて、環境にやさしい製品・技術の開発や、事業場での環境負荷削減に取り組むとともに、国内外で積極的に環境貢献活動を展開しています。

オリンパスは売り上げの約8割が海外というグローバル企業ですが、毎年6月の環境月間には、全世界共通のグローバルイベントとして従業員を対象とした写真コンテストを開催しています(テーマ:未来に残したい自然の恵み)。約千枚の応募の中から選ばれた作品をパネルにして、1年かけて国内各事業場を巡回展示する啓発ツールとして活用。カメラメーカーだけに腕に覚えのある従業員も多く、毎年ハイレベルな写真が集まります。

一方、オリンパスは製造拠点および周辺地域との関係を非常に重視しており、各拠点ごとに、その地域の特性 に 合った活動にも力を入れていきます。日本国内における環境貢献活動は「森林・河川・海における水の循環」をテーマに展開。人を含め、多くの生き物に欠かせない水は、精密機器を製造する上でも不可欠。豊かな水を育む森林や河川・海の生態系の保全を図るために、地元自治体や現地の



NPO法人美ら海振興会の協力の下で実施したサンゴの植え付けの様子



長野事業場では(公財)長野県テクノ財団主催の「天竜川水系環境ビクニック」に従業員とその家族が参加



青森オリンパスがNPO法人白神山地を守る会と実施している世界自然遺産「白神山地」周辺でのフナ植樹

「全員参加」をキーワードとして、 環境月間に「本de寄付」を展開

NGO・NPOと協働連携して取り組んでいます。

例えば、長野事業場では、辰野町、門前山林組合と「森林(もり)の里親契約」を締結。上伊那地方事務所、かやぶきの館、川島区と協力し、地域の森林づくりに貢献するため、従業員と家族が遊歩道整備などに汗を流しました。また同事業場では、

公益財団法人長野県テクノ財団が1994年より主催する「天竜川水系環境ビクニック」にも継続的に参加。これは天竜川水系の市町村が一斉に河川清掃を行う4千人規模のイベント。同事業場から毎年、約200名が参加していますが、長年の取り組みが評価され2013年に主催者より感謝状が贈呈されました。

海の環境保全の事例としては、2012年より特定非営利活動法人美ら海振興会と協力し、沖縄・那覇の西方にあるチービシ環礁で行って

環境行動を日常化できる 「本de寄付」という仕組み

毎年6月に実施する環境月間は、今年で41回目を迎えた息の長い取り組みです。期間中、オリンパスでは前述したグローバルイベントのほか、日本で行う国内イベント、国内外の各拠点での独自イベントの3種類のイベントが行われます。

国内イベントで今年新たに採用されたのが、地球環境基金の「本de寄付」。その経緯を同社の執行役員北村正仁さんはこう話します。

「従来、国内イベントは、外部の著名人を招いて行う環境講演会といった勉強会形式でした。しかし『何らかのアクションを伴わないと、最終的な貢献にはならないのではなか?』ということ、新しい活動案を検討



お話を伺った北村正仁さん
オリンパス株式会社
執行役員
メディカルアフェアーズ・CSR統括室
CSR本部長

新しい活動案を検討

することに。NPOや各種団体の取り組みを調べ尽くしてたどり着いたのが『本de寄付』だったのです」
では、「本de寄付」のどこが決め手になったのでしょうか?
「今年からキーワードとして『全員参加』を掲げたので、まず誰でも気軽に取り組めること。次に、4〜5人の小さな営業所から5千人規模の事業場まで、規模や場所を選ばないこと。それから、社内で完結するのではなく、家庭にまで持ち込めるのが面白いですね。『読まなくなった絵本はない?』と、親子の会話のきっかけになるなど、従業員にも好評を得ています。」
今後も継続していき、ゴールデンウィークの片付けや異動などで要らなくなった本は6月の環境月間に出す、という流れになればと考えます。『本de寄付』は、特別に意識しなく



環境月間の国内イベントとして全グループ会社に掲示したポスターと、65カ所に設置された本の回収ボックス

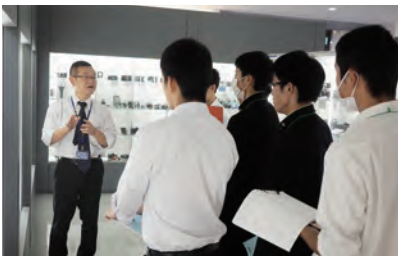
うまくいけば、海外でも同じような仕組みを探し、やがてはグローバルイベントになるかもしれませんね!」

地球環境基金への期待

最後に、北村さんは地球環境基金への期待を次のように話されました。

「今回、基金さんの存在を知り、とても心強く思いました。というのも、私たちのような企業が何百何千とあるNGO・NPOを一つ一つ調べ、コンタクトを取るとなると、膨大な時間と労力がかかるわけです。しかし、基金さんに、環境に貢献したい企業と実際に活動するNGO・NPOとの仲立ちをしていただければ、お互いにWin Winの関係になれる。『絆をつなぐ要』といえいいのでしょうか、基金さんにはそんな役割を期待したいですね」

*写真提供: オリンパス株式会社



日本全国から年間約5千名もの来場者がある、東京・八王子のオリンパス技術歴史館「瑞古洞(ずいこう)」



大腸がん検診・精密検査啓発の一環で、NPO法人フレイブサークル運営委員会の「大腸がん撲滅トイレペーパー」を社内外へ配布



オリンパスグループ社員による地域でのボランティア活動「わくわく科学教室」